

# 校長室からこんにちは!

No. 2 1

10月10日

発行者 中田 禎二

## 本物に触れる

これまで私が勤務した小学校の修学旅行先は大半が奈良・大阪・京都で、法隆寺・金閣寺・東大寺の大仏と映画村が定番の見学コースでした。もっともこの頃は時代劇がほとんど放送されないので、映画村に行っても子どもの興味はお化け屋敷。また、大阪にUSJがオープンしてからはそこで半日過ごすパターンも多くなりました。

例年、そんな他校の情報を聞きながら次年度の見学先を決めるのですが、私は毎年文化遺産巡りを中心とした計画にこだわってきました。もちろん、よほど興味がある子でないと法隆寺を見ても宇治の平等院を見ても大きな感動はないと思います。世界最古の木造建築ですよ、10円玉の図柄ですよと言われても、確かに面白くなく、ガイドの説明もよく分からないかもしれません。

そんなことは百も承知で、「面白くないだろうと分かるからこそ」私は仏閣等こだわってきました。

私がそうし続けたのは、正に「百聞は一見にしかず」ならぬ「本物は一見にしかず」。見ることに価値を認めているからです。子どもたちが大きくなったとき、見た・聞いたことが記憶のどこかに残っているその事実が重要だと思うのです。そして、それが必ずや知性・感性に影響を及ぼしていくと思うのです。先週のカタールフィルの演奏会も本物体験です。掃海艦艇乗船も然りです。

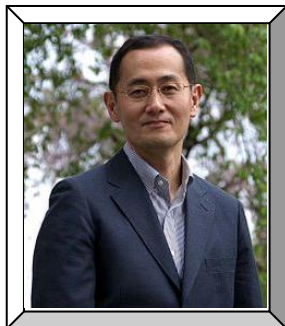
ところで、児童を引率して東大寺の南大門の前に立つ度にいつも思い出す著名な宮大工の言葉があります。それは、『東大寺に修学旅行に来て、さっきまで大騒ぎをしていた高校生のツッパリが大仏を見た途端、しばし見上げて「すげえ」と言った。私はこのツッパリ少年を弟子にしたい。』というものです。

棟梁は理屈も文化的価値も歴史的背景も何も分かっていないこの少年が、本物の迫力に全身で感動したその感性に将来の輝きを見つけたのかもしれない。だから、本物を見た、本物に触れた、本物から感じたという事実が大切だと思うのです。

では、ここカタールで見せる本物があるか。芸術があるか。これは愚問だと思います。厳しい自然環境の中で長年生きてきたカタールの人々の知恵が生み出した文化遺産、それは暮らしの中にたくさん見つけることができるのではないのでしょうか。

私たちはこの視点でこの国を見つめ、子どもたちにこの国の本物に触れさせ、同時に日本の本物の価値についても教えてまいりたいと思います。

## 校長写真館



山中伸弥教授、ノーベル医学生理学賞受賞おめでとうございます。

若干50歳。確かにスーパーマンですが、先日来の報道に接するにつけ、何度も挫折しながら

研究し続けたその秘密は、優しさにあるように思います。ちなみに、2000年以降の日本人受賞者はこれで11人。米国に次いで世界2位との事です。

## ちょっとお耳を...

私は姿勢が悪い。意識しないとすぐに背中を丸めてしまう。最近は食事中しばしば肘をついて日本茶を飲むこともある。

また、少しくらい長い時間の正座は苦にはならないが、何分姿勢がいけない。体重が左にかかり、要は傾いているのだ。

こんなことだから、両手をついての礼も猫が玉を取るような格好になってしまう。

だから、今、剣道や茶道の「所作」に強く惹かれる。日本を離れて気付くその良さの何と多いことか。